

# 成果報告書

記入日 2018年 4月 22日

氏名 中村 昇平	渡航先国名 インドネシア共和国	所属機関 インドネシア大学
研究テーマ：ブタウィ・エスニシティにみる日常生活世界の編成と集団帰属意識の醸成		
研究期間： 2016年 8月 ～ 2018年 3月		
<p>研究成果（概要）</p> <p>ジャカルタの先住者集団であるブタウィの人々の帰属意識を、集落の社会活動に注目して考察した。この考察を通して、エスニシティの可変性や柔軟性の起点を個人の意識の内部に見出すのではなく、個人が参与し、巻き込まれる中で形成され、変容していく集落の社会過程の中に見出す可能性を示した。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p>1. 背景と目的</p> <p>これまで、個人に注目してエスニシティの動態を明らかにしようとする研究の多くは、個別に切り取られた個人の認識や表象に注目することで、公式の集団観念を操作・改変する個人の能動性に固定的な集団観念を打ち崩す可能性を見出そうとしてきた [Baumann 1996]。しかし、個人の認識と表象は、個人がその中で生きる直近の社会的環境と切り離して考えることはできない。本研究は、抽象的な集団観念と対置された個人に注目して主体的な意志に人間の創造性を見出そうとする視点からではなく、直近の環境に時に能動的に参画し (do) 時に巻き込まれる (undergo) 個人に注目して周囲の環境との関与の上に生起していく社会状況の偶発的な推移に人間の創造性を見出す視点 [Ingold 2014] から、エスニシティの動態を説明する。</p> <p>本研究は、ジャカルタ郊外にあるカンブン・ウタンと呼ばれる集落の先住者コミュニティを事例とする。ジャカルタ周辺地域にオランダ植民地時代から居住する人々は「バタヴィアの先住者」として広く認識され、「ブタウィ」というエスニシティ (suku bangsa) に属するものとされる [中村 2014]。当該集落の先住者はみなブタウィ人であり、集落の伝統実践はすなわち「ブタウィ文化」を体現するものとして認識・表象される。本研究は、集落の先住者を中心に運営される自発的な社会組織や社会活動の推移の中で、集落 (カンブン) のコミュニティ意識が形成・維持・変容する過程を、その過程に関与する個人の動向に注目して考察した。この考察を通して、エスニシティの可変性や柔軟性の起点を、戦略的/能動的に行為する主体として想定された個人の内部にではなく、個人が時に能動的に参与し、時に巻き込まれる中で形成され、変容していく集落コミュニティの生活の中に見出すことが本研究の目的である。</p> <p>2. 調査結果の概要</p> <p>主な調査地としたのは、ジャカルタ郊外の西ジャワ州デポック市クルクット区に位置する、カンブン・ウタンと呼ばれる集落である。クルクット区は8の住民会 (RW) からなる行政村落 (kelurahan) であり、人口</p>		

約 15,000、世帯数は約 4,000 である。この内 RW01～04 がクルクット集落で、RW05～07 がカンブン・ウタン、RW08 は新興住宅地を成す。カンブン・ウタンは行政村落制度によっては把握・管理されない自生的集落であるが、日常の認識・表象には明確な帰属意識の表出がみられる。こうした集団的差異の意識はクルクット／カンブン・ウタンの両集落間の差異に加え、新興住宅地に移住した外来住民との間で現在まで強く意識されている。

本研究はまず、先住者の親族範疇の認識や社会組織の調査から、集落の意識を支える要因を説明した。先住者へのインタビュー調査から、第一に、外来住民の流入が増える 1970 年代まで先住者の人間関係は 8 つの親族集団を準拠枠組として認識されてきたことが分かった。

第二に、モスク繁栄会 (*Dewan Kemakmuran Masjid*) と墓地繁栄会 (*Dewan Kemakmuran Kober*) という 2 つの先住者組織の概要を説明し、カンブン・ウタンを範囲とした組織が先住者を中心に運営され続けていることが集落意識の持続性の要因の一つになっていることを示した。前者は後援者 1 名、相談役 2～3 名、代表 1 名、副代表 1 名、秘書 1 名、会計 1 名からなる任期 3 年の役員のもとに、建築部門、渉外部門などの各部門が組織されている。後者は代表 1 名、副代表 1 名、助役 1 名、埋葬役 1 名、会費徴収役 6 名からなる任期 5 年の役員が世帯ごとに月 10,000 ルピアの会費を徴収し、会員に死者が出た場合に葬儀用具一式を提供し、共有墓地に埋葬する。外来住民であっても集落に 15 年以上居住し、本人が望めば会員となることが可能である。

第三に、先住者が中心となって運営する青年会の活動にあらわれる集落意識を、参与観察とインタビュー調査から明らかにした。2000 年代までに活動休止を複数回経験したモスク青年会 (*Ikatan Remaja Masjid*) は、当時活動が盛んになっていた集落内小地区を基盤とする 8 つの青年会 (*Ikatan Remaja*) の連合として再興された。各青年会の地理的範囲はそれぞれ路地の名と重ねて認識されており、行政村落制度上の組織として住民会ごとに設置される青年会 (*Karang Taruna*) とは範囲も名前も異なる。集落／小地区をベースとした青年会の成立の経緯を考察することに加えて、活動にあらわれる集団的差異の認識・表象を考察することで、盛衰を経ながらも集落を地理的範囲として繰り返し再興される自発的社会活動としての青年会の活動が、カンブン・ウタンの集落意識の継続性を支える大きな要因となっていることを示した。

自発的な社会活動にあらわれる集落の意識をより詳細に考察するため、本研究では、親族や社会組織の調査に加えて武術実践に注目して参与観察を行なった。「ブンチャック」や「シレ」など様々な名称で呼ばれていたインドネシア各地の武術実践は、独立以降のスポーツ化を目指す全国組織の運動の影響で「ブンチャック・シラット (*pencak silat*)」と総称されるようになった [水上 2006]。ブタウィの人々も武術に言及する際、現在は「シラット」の呼称を頻繁に用いるが、昔は「拳遊び」を意味する「マエン・プクル」と呼んでいたという事実が広く認知されている。ブタウィの武術の起源は多種多様で、各々の流派の動きの特徴を見れば、詠春拳や空手、合気道を思わせるものから象形拳まであり、一見して分かるほどの差異を示している。また、



カンブン・ウタン内小地区と青年会

住民会	青年会名称	地区／路地名
RW05	IRMAK 青年会	Saun
RW06	ガルール青年会	Galur
	ペリン青年会	Perin
	上の食堂青年会	Lapangan Bola
RW07	アンバラ青年会	Ambara
	マドラサ青年会	Madrasah
	ペトルック青年会	Petruk
	奥サウオ青年会	Sawo Dalam

本研究が主要な調査対象としたカンブン・ウタンの事例のように、武術の教授は集落の社会活動として行われることが多い。しかしそれにもかかわらず、「マエン・プクル」がブタウィの武術の総称として頻繁に言及されることに加え、武術実践が日常から（ブタウィ式の結婚式で余興として演じられる「パラン・ピントウ」という演劇の形式などの）文化実践と結びつけて認識・表象されることもあって、多様な武術流派の文化実践は集落独自の実践として表象されると同時に、ブタウィの文化実践としても表象される。このことから、武術にまつわる社会活動を考察することで、集落の活動にあらわれるエスニシティの動態を明らかにできると考えた。

定期練習会への参与観察では、教授する側が「正しい動き」の背後にある意図 (*maksud*) あるいは論理を説明し、学習者が自身の肉体を通してその合理性を体感するよう仕向けることを強く意識する様子が顕著に見られた。カンブン・ウタンの武術実践にもう一つ顕著な特徴として見られたのは、適切な理解に基づいてさえいけば、伝統実践である武術の形式上の改変が肯定され、「伝統」の存続には必要不可欠だとすら考えられていることだった。

本研究では、長期の参与観察とインタビュー調査から、伝統の理解と改変に関わる上の2つの意識が、いずれも個人の単独性の尊重という態度に支えられたものであると結論づけた。カンブン・ウタンの武術実践に参加する人々は、他の参加者の動向や状況の変化に細心の注意を払いながら思考・行動する。また、自身の思考や行動が周囲の環境に巻き込まれながら展開するという事実にも自覚的である。個々の動きの教授の際に必ず論理を提示し、その論理を学習者が体感して自発的に納得するよう仕向ける教え方にこだわる対面相互行為の態度は、個々の身体感覚に基づいて展開する他者の思考と行動の機微を尊重する意識を反映したものだと考えられる。

個人を尊重する意識の上に、意図 (*maksud*) を体感 (*rasa*) によって納得 (*akal*) することで初めて得られるものが「適切な理解」であるという共通認識が醸成されている。「伝統の理解」に関するこの共通認識があるからこそ、適切な理解に基づいた伝統の改変が、身体感覚に基づいた個人の創造性の発露として尊重されるのである。加えて、個人が周囲の環境の変化に巻き込まれながら展開する過程として意識されているからこそ、社会状況の変化に適応して伝統を改変していくことが、その存続に必要な過程として認識されていると考えられる。

### 3. 研究成果の概要

以上の調査を通して本研究は、エスニシティの動態を集落の生活の中に位置付けて説明することを試みた。行政村落制度に組み込まれなくなった自生的集落の意識が存続する要因を、周囲の環境に巻き込まれながら展開する過程として個人を捉え、その単独性を尊重する相互行為に基づく集落の社会活動の展開から説明した。「ブタウィ文化」としても表象される集落の伝統実践において改変が称揚されているという事実は、エスニシティの変容が日常から肯定的な意味づけを与えられており、その可変性・柔軟性の根拠が集落の生活実践にあることを示している。さらに、集落を起点とした社会活動の中で伝統の改変が個人の独自性の発露として尊重されるという事実は、エスニシティ内部の集団的差異・多様性が、個人の創造性と結びつけて尊重される可能性を示している。

以上の成果は博士論文にまとめ、2018年3月に京都大学文学研究科から博士号を授与された [中村 2018]。

#### 参考文献

- Baumann, Gerd, 1996, *Contesting Culture: Discourses of Identity in Multi-Ethnic London*, Cambridge University Press.
- Ingold, Tim, 2014, "The Creativity of Undergoing," *Pragmatics and Cognition*, 22(1): 124-39.
- 水上浩, 2006, 「インドネシアの武術ブンチャック・シラットの稽古とことばの役割」『目白大学総合科学研究』2: 151-64.
- 中村昇平, 2014, 「ブタウィ・エスニシティの歴史的変遷過程——現代ジャカルタでバタヴィア先住民が示す『異質な他者』への寛容性の起源」『ソシオロジ』59(1): 3-19.
- , 2018, 『都市先住者のエスニシティ——「バタヴィア先住民」ブタウィの集落と帰属意識』京都大学文学研究科博士論文.

## 留学中の生活・研究でのトピックス

留学中は、バンテン州タンゲラン市にある貸家 (*kontrakan*) に滞在した。この貸家は、本研究の実施以前、2012年から断続的に行なった調査の際にホームステイした友人宅の真隣に位置する。調査期間中はこの貸家に居住しながらデポック市の集落に通って調査を行なった。居住地から調査地まではバイクに乗っても1時間余りかかる上に、武術の練習は夜中から朝方まで行うことが多かったので、調査対象集落を訪れた際は現地の複数の友人宅にもお世話になった。調査集落の友人とは、もともとホームステイ先の友人の紹介で2013年ごろに知り合い、それから成り行きで武術の練習に通うようになっていた。

しかし当初は、武術を調査研究のトピックとして扱うことを全く想定していなかったばかりか、その活動の背後に「集落」の組織や共同性があることにもなかなか気づくことができずにいた。当該集落に通い始めて1年が経ち、2年が経ったころに初めて、行政村落とは異なる集落としての「カンブン・ウタン」の存在を知り、武術実践を集落の活動として捉える視点に思い至った。そのような時期に松下幸之助国際スカラシップの助成を受けることになり、本研究を遂行することができた。この助成を受けたことで、集落の社会組織や活動について調査を行うことが可能となり、その全体像を把握した上で、集落の社会生活の中に位置付けて武術実践を考察することができた。

本研究の重要な成果の一つは、ジャカルタ周辺地域にも社会組織と共同体意識を備えた先住者集落が存在すると示すことで、行政村落制度と自生的集落の不一致を論点として展開してきたインドネシア各地方の慣習村 (*desa adat*) 研究とジャカルタ大都市圏の状況との接続可能性を示した点にある。この研究成果については、インドネシア大学で開催された文化人類学系のシンポジウム等で複数回発表し、在インドネシア研究者との交流を通して議論を発展させることができた [Nakamura 2017a; 2017b]。これも、当財団の助成を受けてインドネシアに長期滞在することで可能となったことである。重ねて感謝の意を記したい。

## 参考

- Nakamura, Shohei, 2017a, “Yang Diperhidupkan Akan Bertahan: Makna Tradisi dan Pandangan terhadapnya bagi Masyarakat Sebuah Kampung Betawi,” *Acara Diskusi KOMPAK (Komunikasi Peneliti Anak Muda) dan Cak Tarno Institue*, Depok: Indonesia (September 2017).
- , 2017b, “Identitas Etnis dan Perasaan Berkelompok Perkampungan Masyarakat Betawi,” *Konferensi 60 Tahun Antropologi Indonesia*, Depok: Indonesia (September 2017).

## 今後の社会貢献

今後の社会貢献として、まず本研究の成果を隣接領域の研究成果と接続することを目指す。関連領域の研究者との交流を通してジャカルタ周辺地域の事例をインドネシア諸地域の慣習村研究の成果と接続し、比較可能なものとすることを目指す。さらに、日本の農村社会学で蓄積されてきたインドネシアをはじめとするアジア諸地域の村落研究の中に本研究の成果を位置付けた上で、社会学、東南アジア地域研究の研究者との学術交流を進め、これまでの関連領域での研究成果を踏まえた上で東南アジア地域の村落研究に新たな視点を提示することを目指す。

これに加えて、在ジャカルタの研究者、郷土史家、出版関係者や行政関係者、社会活動家、調査対象地域の実践者、生活者との交流を通して、調査成果を現地社会に還元する可能性を探る。現地への還元の方法には、伝統文化実践に関わる地域の活動に参加してその振興の一端を担うことから、調査対象地域の人々との交流・議論を経た上で調査内容を書籍化することで知識の整理・蓄積に貢献することまで、様々な可能性が考えられる。ブタウィ文化の振興を担う行政組織 (ブタウィ文化研究所) や出版社兼社会活動組織 (コムニタス・バンブー) と連携してセミナー、研究会を行い議論を重ねることで、本研究の成果が調査対象集落に限定されない広い文脈でのブタウィ文化の振興に資する可能性も探る。



写真 1:モスク青年会の会合



写真 2:武術練習会の様子



写真 3:演劇「 paran・ピントウ」の一場面

